

歯朶具足

徳川家康公（1542-1616）が関ヶ原の戦い（1600）と大坂の陣（1614-1615）で着用した鎧である。この勝利によって天下人の地位を確立し、歴代の将軍はこの鎧を模倣し、同じような成功を収めようとしたのである。

この鎧は、兜に取り付けられた金色の花輪から「歯朶具足」と呼ばれている。花輪のシダは、正月飾りに使われる縁起の良い植物である。紋章の獣の頭は神話上の生物を表している。顔は怒った獅子のようだが、角と耳は他の動物のものである。

このシダ紋は、兜や鎧のオリジナルではなく、鎧屋から贈られたものである。紋がなければ、百姓を装った大黒天がかぶっていた布製の帽子に似ている。大黒天は富と豊穰の神である。家康公は大黒天の衣裳を真似ることで、大黒天の化身として豊かな時代を約束することを伝えようとしたのだ。

兜、面、袖や脛当てなどの固い板は鉄でできている。胴体と下半身を覆う小さな板は、鉄と革でできている。鉄は重要な臓器を保護するために使われ、革は傷つきにくい部分に使われた。鉄と革の組み合わせにより、鎧全体の重量を軽減しながらも、十分な防御力を発揮することができた。

家康公の歯朶具足は、家康公の死後、久能山東照宮に奉納されたのがはじまりである。1647年、徳川三代将軍家光（1604-1651）が江戸城に移した。1882年、幕府崩壊後の徳川家初代当主である徳川家達（1863-1940）によって久能山東照宮に返還された。

重要文化財